

平和について考えてみましょう！（2）

「広島平和記念公園」、「長崎平和祈念公園」と使う漢字が違うことを知っていましたか？漢字の意味としては近いようですが、何となく地域の特性が出ているような気がします。「怒りの広島」「祈りの長崎」と言われることもあります。先週は、広島の佐々木禎子さんについて書いたので、今回は、長崎で活躍された永井隆博士について書いてみます。

永井博士は島根県に生まれました。医者を目指し、長崎医科大学に入学し、卒業後は放射線医学を研究しました。この頃治らない病気と言われていた結核を研究するために、一日に何百人ものレントゲン写真を撮るという無理が重なって白血病に罹り、余命数年という宣告を受けます。そんな中、今度は被爆します。幸い、二人の子供は疎開をさせていたため難を逃れましたが、奥さんは自宅で被爆して永井博士が3日後、自宅に戻った時に、黒焦げで骨だけになった奥さんを発見します。その後も被爆した人たちの看護にあたり、病気のせいで体が不自由になった後も原爆の被害報告書や平和に対する願いを本にしました。町の人や教会の援助で、療養のための家が作られました。そこを如己愛人（自分と同じように人を愛する）の精神から「如己堂」と名付けました。生前、子供たちへの思いをこう書いています。「私が眠ったふりしていると、カヤノは落ち着いて、ほほをくっつけている。ほほは段々あたたかくなった。何か人に知られたくない小さな宝物をこっそり楽しむようにカヤノは小声で、『お父さん』といった。それは私を呼んでいるのではなく、この子の小さな胸の奥におしこめられていた思いがかすかに漏れたのであった。」（永井 隆著「この子を残して」より）博士の身体は、白血病の影響でヒ臓が肥大し圧迫による内出血の恐れがあるので、子供たちを近づけることができなかった状態でした。そんな中でも親としての思いも強いものがありました。「一日でも一時間でも長く生きてこの子の孤児となる時をさきに延ばさねばならぬ。一分でも一秒でも死期を遅らしていただいて、この子の淋しがる時間を縮めてやらねばならない。」（永井隆著「この子を残して」より）

小さな畳二畳の如己堂から発表される作品や言葉は、世界中の人々の胸を打ち、国内外に広く知られるようになり、天皇陛下のお見舞、ヘレン・ケラー女史やローマ法王特使などが訪れました。その他たくさんの友人・知人・遠方からの訪問者・近所の人々など多くの人々が博士の住む如己堂を訪れました。別れの時は突然やってきました。二人の子供たちが看取る中、かつての職場である長崎大学付属病院で博士は力強い祈りの声の後、静かに帰天しました。（享年四十三歳）生前、永井博士が書かれた本の印税で、被爆し亡くなった児童と教師のために「あの子らの碑」が建てられました。その碑に対して永井博士は、「・・・この石碑に敬礼しろ、などと強制するようになったらだめですね。・・・この石の上に子どもたちが乗って遊んでいいじゃないですか。石碑が高かったり、細長かったりすると遊ぶのに危険ですから、ずんぐりして低い危険のない石碑にしてもらいました。長い年月の間には、この石碑が何のために建ったのか、分からなくなるかもしれません。でも、子どもたちは、遊びながら「この石碑の絵は何をしているのだろう。平和っていったいどういうわけだろう。むかし、何千何万の人が原爆で死んだげな、じいちゃんがそう言いよったばい。」などと話し合うでしょう。建設者の名前だとか年月日とか、そんなものは一切書かない方が良いでしょう。死んだ兄弟姉妹や子や親を悼むために、そして、平和を求めるためにですね・・・」と言っています。まさに「人を愛し、平和を願い、忍耐と奉仕に生きた人でした。私たちは博士の意思を大切にしていきたいと思います。

